丹羽文雄「厭がらせの年齢」の一考察 ―社会的背景を踏まえて―

水川布美子

はじめに

日本の男女平均寿命は八三・七歳[1]で、世界随一の長寿国である。長寿は尊ばれる一方で、新聞紙面には「独居老人」「孤独死」「一億総介護時代」「限界国家ニッポン」「二〇二五ショック（二〇二五年問題）[2]」「介護難民」「老々介護」等の言葉が散見し、長寿の齎す副作用が深刻な社会問題となっている。

その中でも、殊に深刻なのが認知症に関する諸問題であろう。認知症とは「生後いったん正常に発達した種々の精神機能が慢性的に減退・消失することで、日常生活・社会生活を営めない状態」を指し、「最大の危険因子は加齢」で、「六十五歳以上の高齢者における有病率は八～十％程度と推定」されている[3]。有病率は今後増加するとみられており、二〇二五年には七百万人、「約五人に一人になるとの推計もある」という[4]。

このような状況は文化面にも反映され、様々な介護体験記や対策本は枚挙に遑がなく、小説の題材ともなっている。その中には、モブ・ノリオ「介護入門」（第一三一回芥川龍之介賞）、羽田圭介「スクラップ・アンド・ビルド」（第一五三回芥川龍之介賞）、葉真中顕「ロスト・ケア」（第一六回日本ミステリー文学大賞新人賞）、佐伯一麦「還れぬ家」（第五回毎日芸術賞）など、各賞を受賞した作品も少なくない。映像分野でも、小説の映像化だけではなく、ドキュメンタリー映画の「毎日がアルツハイマー　ザ・ファイナル　最期に死ぬ時」や「ぼけますから、よろしくお願いします。」が二〇一八年に公開された。

高齢化社会は日本近代文学の中で、いつからどのように描かれてきたのか。認知症患者やその介護を扱った作品として有名なのは、昭和四十七年に刊行された有吉佐和子の『恍惚の人』であろう。翌年には映画化され、また舞台上演やテレビドラマ放映もされた。それ以前の作品では、川端康成の「十六歳の日記」（大正十四年、初出時の表題は「十七歳の日記」）も、一種の介護小説といえるかもしれない。十六歳の少年に介護される祖父は、目が不自由な上、一時間前の食事を忘れ、排尿も困難である。

これらの作品は、平和な時代における高齢者の様相を描いている。誰もが生きることに必死だった戦時中、高齢者は過酷な状況に追いやられていた。藤寿々夢氏は「黄昏文学のルーツは丹羽文雄の『厭がらせの年齢』にはじまる」と指摘する[5]。ここでは丹羽文雄の「厭がらせの年齢」を取り上げ、現代とは認知症に対する認識も周囲の対応も、また社会情勢も大きく異なる当時の状況を踏まえた上で、作品を分析していきたい。

一　流行語について

「厭がらせの年齢」は、昭和二十二年二月「改造」に発表され、同年五月『理想の良人』に収録された。両者に大きな異同はない。河野多恵子は「発表されるや非常な評判と」なり、「当時は、標題そのものが流行語ともなり、様々の場合によく使われたくらいだ[6]」と述べ、このことは他の文献など[7]でも確認できる。また、高橋正雄氏は、本作の「発表以来、『老醜』という言葉が流行語になったという」と述べている[8]。しかし、当時は「流行語大賞」のようなものはない。管見に入った、流行語を扱った辞典類十二冊[9]のうち、昭和二十二、三年に採られている語の上位十二語は、表のようになる。なお、左欄は十二冊のうち、採られている冊数を示す。

文学関係では織田作之助の「土曜夫人」の表題、太宰治「斜陽」から生まれた「斜陽族」、獅子文六「てんやわんや」の表題が上位に入っている。高齢者関係の語では、歌人・川田順の恋愛事件から生まれた「老いらくの恋」が見られる。上位に入らないだけではなく、「厭がらせの年齢」を取り上げた書物は一冊もない。では、なぜ辞典の編者たちは、「厭がらせの年齢」を採らなかったのであろうか。実際は「流行語」ではなかったのだろうか。

昭和二十八年に刊行された『西鶴　評論と研究　下』において、暉峻康隆は「世間胸算用」の「鼠の文づかひ」のテーマを「中産

/12	昭和22年	昭和23年
11	額縁ショー（ストリップショー）	老いらくの恋
		斜陽族
9	不逞の輩	鉄のカーテン
		ノルマ
8		冷戦（冷たい戦争）
7	共同募金（赤い羽根）	アプレ（アプレゲール）
	ブギウギ（ブギウギ時代）	
6	裏口営業	
	オンリー	
	こんな女に誰がした	
	六・三制	
5	そのものズバリ	てんやわんや
	土曜夫人	ハバハバ
	ララ物資	
4	ベビーブーム	アロハシャツ
		サンドイッチマン
		主婦連
		ニュールック

階級の老人気質の描写にある。丹羽文雄のいはゆる『厭がらせの年齢』である」とした上で、「西鶴のこの作品は、さういふ町人社会の厭がらせの年齢を描いてみごとである」と論じている[10]。この老婆は、吝嗇で強欲が過ぎるが、「厭がらせの年齢」の「うめ女」のような認知症的症状は見られない。それでも、このように「厭がらせの年齢」という語を使用していることから、「様々の場合によく使われた」一例といえよう。また、同年刊行の橘覚勝『としよりの心理』[11]には、「不満と反抗の時期」の章で「『いやがらせの年齢』」の節が、昭和三十三年刊行の生活科学調査会編『老人のくらし』[12]では「老人の心理」の章で「厭がらせの年齢―老人痴呆―」の節がそれぞれ立てられている。これらも「様々の場合」といえるであろう。

二　モデルについて

作品内容は以下のとおりである。八十六歳のうめ女には、三人の孫娘と復員していない孫がおり、美濃部（次女幸子夫妻）の元で生活していたが、美濃部家は戦争で罹災、疎開を機に伊丹夫妻（長女仙子夫妻）に預けられる。伊丹家はうめ女を厄介者扱いし、同居している三女瑠璃子を使いに、疎開先の美濃部家にうめ女を強制移送する。美濃部家には子供が三人おり、一家五人が農家の二間を借りて生活している上に、うめ女の世話をすることになる。うめ女は、物を盗んで隠す・食事をしたことを忘れる・トイレの場所が分からず毎夜夫妻を起こす、等の認知症的な症状を呈す。一家が借家に帰京してから、うめ女の症状は悪化する。真夜中に空腹を訴える・粗相をする・家の中から盗んできた布類を裂く・来客や近所の人の同情を得ようと芝居をする、等である。幸子は「あたしたちを厭がらせるだけの生命なんて、ちつとも尊重出来ない」と言う。六十三歳の時に死別した一人娘の写真を見て、うめ女は泣く素振りを見せるが、すぐに盗んだ曾孫のパンツのゴムを引き抜く。

古谷綱武は「敗戦後の丹羽文雄の私生活については、すこしも知るところがないので、丹羽が、この作品の素材を、どこから得てきたかは、私には、まるで、見當がつかない」としながらも「美濃部と人間丹羽文雄とのあいだには、非常に似かよつたところがつよひ」、あるいは「美濃部の、ちよつとした素振りや口のきき方にもうずいぶん會わない友人丹羽を、なつかしくおもいださないではいられなかつた」と述べている。その上で「美濃部の被害を、じぶんの被害と肉感しているその『理由』が、作品の迫力を形成している」と指摘する[13]。亀井勝一郎は疎開地で「様々ないのちの、こじれて沈澱して行く相を凝視する貴重な時間をもつたであらう」と推測している[14]。

本作は「夫人の身内に材を得たもの[15]」といわれている。佐々木亜紀子氏は尾崎一雄の「続あの日この日」を挙げ、「丹羽文雄の体験が契機となって書かれたことが判る」と指摘する[16]。佐々木氏が挙げられた箇所以外にも、尾崎の母が亡くなった時、「う

ちのおふくろは、子供孝行だよ。かういふ中で、君の小説の中の老人みたいになられたら、全く処置なしだからね」と言ったのに対し、丹羽は「ううん、あれは大変だつた。おふくろさんは、結局呆けなかつたんやな」と答え、また「うちのあれには参つた」と述べたとも記されている[17]。

また、『理想の良人』の「あとがき」によれば、「この作品は「二日間で書い」たものであるが、「疎開中に考へてゐた材料であり、材料をあたためてゐたのは数年にもなるのである」と記している。そして本作と表題作について「様々の問題を提供出来て、作者は満足である」と述べ、『鬼子母神界隈』と『理想の良人』は「戦争を通つて来た自分の一里塚として、忘れられない創作集のつもりである」と述懐している[18]。

これらのことから、「厭がらせの年齢」は、作者自身の体験を元に、二年前後の熟成期間を経て、二日で書かれた自信の作、思い出の作であることが分かる。

三　認知症の認知度

永井博氏は「うめ女に認知症の症状が発症するのは、第3節からである」と指摘する[19]。さらに詳細に分析したのが先の高橋氏で、うめ女の行動を挙げ「記憶障害・見当識障害・人物誤認・判断力の障害・火の不始末・収集癖・常同行為・嘘言・排泄障害」を指摘し、「重度の痴呆性高齢者にしばしばみられる症状」と論じている。うめ女は伊丹家にいる時から盗癖（収集癖）が見られるので、認知症の発症が第3節とはいえない。時間の経過や環境の変化と共に悪化したというべきであろう。

作中人物に留まらず、うめ女の言動・行動に対する批判は、評論家も行っている。山本健吉は「生を完了した肉体・もうあとには死ぬことだけが残されている存在・精神のない肉体[20]」等、作中内外の表現で酷評している。そして「人に精神的な若さを保たしめるものは、身につけた生活の知恵によることが非常に多い」と主張する。前出・橘覚勝も、うめ女のような「不適応行動」に対し「まずは自分の態度をかえること」を勧め、「老人クラブ員とか医者とか民生委員とかいう人達の助言、慰藉、または指導、新しい活動への訓練、相談または治療」が「有効」であると説く[21]。ここには、うめ女の行動が認知症によるものであるという認識は見られず、自力での対処を求めている。老年を語ったものの中では、例えば鹽尻公明が、子の成長と煙草に関する老年時代の夢を二つ語り、「どういふ型の晩年でなくてはをさまらないといふ拘泥がなくなりさへすれば、如何なる人も如何なる場合にも、輝かしい老年をもつことが出来る筈」と述べている[22]。「如何なる場合」の中に、認知症という病に罹る可能性は考慮されておらず、心の持ちようで己の老後を自由に支配できるという過信が見られる。では、認知症はどのように認識されていたのか。

江戸時代に描かれた仙厓義梵の「老人六歌仙」（出光美術館蔵）には次のように記されている。

しわかよる　ほくろか出来る　腰まかる　頭ははける　ひけしろくなる／手は震ふ　あしはよろつく　歯は抜ける　耳はきこへず　目はうとくなる／身に添うは　頭巾襟まき　杖へ目鏡　たんほ温石　しひん孫の手／聞たかる　死とむなかる　淋しかる　心は曲る　欲深ふなる／くとくなる　気短になる　愚痴になる　出しやはりたかる　世話焼きたかる／又しても　同し話に　子を誉る　達者自まんに　人はいやかる

これは一般的な高齢者の特徴を捉えているともいえるが、「又しても同し話」あたりは、認知症の初期段階かとも疑われる。絵はユーモラスで、老いに対する負のイメージは見られない。

明治十三年十一月七日の「朝日新聞大阪版朝刊」（三頁）に、倉橋長七の母おきよ（六十三歳）が、夜中に行方不明になり翌朝、溺死体で巡査に発見された事件が掲載されている。おきよには「少しく発狂の兆し」があり、「鍼灸薬餌」を施し「看護人を付て座敷に閉籠置」いたところ「追々正気に趣」いたとある。ここでは「発狂」とあるが、状況から認知症であると推察される。「鍼灸・薬餌」が当時の治療法であり、「座敷に閉籠」するのが、徘徊への対処法であったことが分かる。幕末から明治にかけての西洋医学の導入によって認知症は病気とみなされるようになり、その患者は癲狂院に収容されるようになったという[23]。

アルツハイマーがアルツハイマー病の最初の症例を報告したのは一九〇六年である。八〇年代には病理像の解明が進み、二〇〇〇年代は脳画像解析と脳脊髄液サンプルによる病気の追跡が可能になった[24]。認知症は、アルツハイマー型・前頭側頭型・レビー小体型・脳血管性などに分類され、現在ではアルツハイマー型認知症の促進因子に生活習慣病が指摘されている。四種の抗認知症薬が使用され、根本治療薬の開発も進んでいるという[25]。

さて、先に挙げた『老人のくらし』では、うめ女の症状を「いってみれば、「老人性痴呆」と名づけられる立派な精神病であって、脳が老人性変化することによっておこるものである」と、「精神病」との誤謬はあるが、病気の認識を示している。山本及び橘の認識から五年で、認知症が病気であるという認識が広まったとは考えづらい。「恍惚の人」が発表された時でさえ、「認知症の表面的な症状や行動上の問題だけが強調され、正しく認知症の理解が得られ」なかったという[26]。一般人には、まだ病気の認識はなかったのではないかと推察する。

四　敬老と棄老

美濃部は親孝行に疑問を呈する。「孝行をつくしたい相手が、度々こちらの心に病氣を起させる。その事實を、孔子は少しも重大には考へなかつたやうである」「生とは何のことやら判らなくなつてしまつた人間に對して、孔子流に敬ふことは、偶像崇拝であらう」と述べる。

日本だけではなく、世界には敬老と棄老、双方の思想・動向がある。『聖書』には「あなたは白髪の人の前では、起立しなけれ

ばならない。また老人を敬い、あなたの神を恐れなければならない。わたしは主である」（レビ記一九－三二）[27]と記され、また「老いた者には知恵があり、命の長い者には悟りがある」（ヨブ記一二－一二）とあるが、これはエリフが一旦、否定する[28]。老人の務めとしては「老人たちには自ら制し、謹厳で、慎み深くし、また、信仰と愛と忍耐とにおいて健全であるように勧め、年老いた女たちにも、同じように、たち居ふるまいをうやうやしくし、人をそしったり大酒の奴隷になったりせず、良いことを教える者となるように、勧めなさい」（テトスへの手紙二－二、三）と記す。これは裏を返せば、老人は自ら制し難く、人を謗る傾向が現れやすいことを示しているとも考えられる。老人を無条件に敬え、というのではなく、老人の性向を認識した上で、老人側にも自律を求めていると解される。

『コーラン』には「自分の両親には、その一方、または両方ともお前のところで老齢に達した場合、できるだけ優しくいたわってやるように」（夜の旅二四）[29]と記されている。老人一般ではないものの、「言葉を荒らげて叱ったりしてはならぬ。丁寧な言葉づかいで話しかけよ」と老いた親への接し方を諭している。『論語』には「郷人飲酒、杖者出斯出矣（郷人が集まって酒を飲む時、老人が退出すれば孔子も随って退出する。先だつこともなく、後れることもない。郷党では年長者を尚ぶからである）」（郷党第十）[30]とある。「長幼有序」とは孟子の説く「五倫」の一つであり、儒教では敬老の精神が重視される。

また、古代ギリシャでは「子どもが年老いた親の面倒をみることは法的、道徳的責任」であり、「アテネの法律は、老親を養わない者は市民権をはく奪するという内容」[31]だったという。

棄老に関しては、姥捨山伝説が有名である。大島建彦は「老婆致富型」「枝折り型」「親捨てもっこ型」の三種と「雑宝蔵経第一」から生じた「難題型」の計四種に分類する[32]。「棄老国物語」は以下の内容である[33]。棄老の制令のある国に天神がやって来て難題を出し、答えられなかったら国を滅ぼすと国王に告げる。密室に父を匿っていた大臣が父に答えを聞き王に告げる。それが繰り返され、答えに満足した天神は国王に財宝を贈り、国土の擁護を誓う。喜んだ王が大臣を賞賛すると、大臣は真実を告げ、王は孝養の布令を出す。世界の童話では、天神が悪魔になっていたり、難題の内容が異なっていたりする。結果的には敬老を勧めるのであるが、棄老が前提となっている。

棄老伝説は各国にあり、「ホッテントット人は同族の同意をえて小屋をつくり、そこに老人を捨てて餓死や窒息死させ、フィージアン人は、親戚の了解をえて生き埋めにし、ニューギニアのパプア人は木につるした老人を杖をふるってたたき落して殺し、ある種族は同情と尊敬をもって老人の肉を喰う」と記す書がある[34]。

さて、作品の舞台は戦中戦後である。作中には「政府は六十一歳からは減配」されたことが描かれている。しかし、うめ女はそれが理解できない。一日六回食事をし、自分だけが代用食を与えられていると疑っている。「成人は一人一日二合三勺の配給を受

けたが、六十歳以上の高齢者たちは二合一勺に制限」され、「大都会では空襲が激しくなるにつれ、『老幼者』は『足手まとい』として地方へ疎開を奨励されるなど、次第に社会の余計者としての色彩が強められていった」という[35]。そしてその反省からか、昭和二十二年、「戦争で一番えらい目におうとってんはお年寄りや。大切にしなあかん」と、兵庫県の旧・野間谷村の青年村長・門脇政夫が提唱したのを契機に、兵庫県が二十五年に「としよりの日」を制定する。翌二十六年に全国社会福祉協議会が全国的に推進、以後、老人福祉週間として全国各地で行事や運動が展開される。三十九年に「老人の日」と改称され、四十一年に国民の祝日「敬老の日」となる[36]。敬老思想が維持できるのは、平時に限られるのかもしれない。

五　老人ホームについて

幸子は「日本の今までの養老院は設備が悪く、扶養能力のない人のために、仕方なしに世話をしてやるのだといふ観念から出來てゐるだけに、老人ホームの必要を痛切に感じてゐながらも、誰もアメリカ風の老人ホームの實現にのり出さないのね」と語る。後年、中山保は「老人ホームの必要は前々から痛感せられていたことだろうが、一つには家の制度という醇風美裕（ママ）の為め、もう一つには資金難のために行き悩みの状態を続けていたものと思われる[37]」と述べており、「老人ホームの必要を痛切に感じてゐ」ると見ている幸子の見解と一致している。

日本における老人ホームの起源は「悲田院」であるといわれ、「古くは聖徳太子建立の四天王寺に付設された四箇院（敬田・施薬・療病・悲田院）の伝承」にみられる[38]。近代では明治二十八年の聖ヒルダ養老院が老人だけを収容保護した最初の施設とされるが、それ以前にも小野自善院（元治元年）、東京府養育院（明治五年）、大勧進養育院（明治十五年）等で老人を収容していたという[39]。養老院を訪問・紹介した記事は当時の雑誌や専門誌に散見されるが、紹介文である以上、当然のことながら「設備が悪」い等の記載はない。小説では、間宮茂輔の「老人ホーム[40]」が見られる。松田女史が運営する東京老人ホームは、月十五円の食費を納入する者さえいれば、「親戚に百萬長者がゐようとも」収容される、養老院でも施療院でもない「老人ばかりをいれるアパートに似て」おり、「かういふ社會事業にありがちな小面倒臭い規則」はない。「〇番さん」と部屋番号で呼ばれる入居者たちの生活や死にざまを描いた作品である。施設は充実しており、「仕方なしに世話をしてやるのだといふ觀念」は見られない。

「扶養能力のない人」については、例えば浴風会では入園条件が「一、自活能力ナキ老衰者又ハ不具廃疾者／二、救護法ニ依リ救護ヲ受クル老衰者又ハ不具廃疾者ニシテ市區町村長ヨリ委託セラレタル者／三、軍事扶助法ニ拠リ扶助ヲ受クル老衰者ニシテ地方長官ヨリ委託セラレタル者」（浴風会事業報告　昭和十七、十八年度[41]）となっている。幸子の養老院に対するマイナスのイメー

ジは、家庭で介護すべき高齢者が、諸事情により単身、収容されたという先入観によるものと推察される。

「アメリカ風の老人ホーム」について、佐々木氏は「『アメリカ』への賞讃は、被占領国における刷り込みかとすら感じられる」と述べている。アメリカは自由・自助の国であり、メディケア（高齢者・障害者のみを対象とした医療保険制度）、メディケイド（低所得者を対象とした医療・介護扶助制度）が成立したのは一九六五年で、作品発表から十八年後である。「アメリカ風の老人ホーム」は民間施設であり、公的なものではない。その老人ホームが快適であったかといえば、そうとはいえない実態がある。昭和三十五年刊行の『老人福祉』には、「ニューヨーク市にあるピーボディ老人ホームは、貧しい老婦人を無料で収容する養老院であるが、この養老院で色々と老人のことを研究した結果、収容されている老婦人のなかには、養老院へ収容せないで自宅で保護した方が却って幸せであったと思われる婦人が多数いることが判明した[42]」と記されている。入居申請が増加したので、施設の建て増しや設備の拡張に「金をかけずに保護をはかることにした」という。老人ホームが充実していたのは北欧であり、夙にエディス・セルラースは『欧州救貧事業の大勢[43]』の「丁抹及び露西亜の養老院」で「養老院は最歓楽の住居」「丁抹の養老院は真の最良」と紹介している。なお、日本では昭和二十七年に、厚生省が全国初の有料老人ホームを六大都市に新設することを決定している[44]。

六　家族制度について

幸子は「アメリカ風の老人ホームの實現にのり出さない」理由として、「一つには日本の家族制度が間違つてゐる」と語る。それを受け美濃部も「日本人は離ればなれになつた方が、却つて人生が幸福に送れるといふ考へ方を、家族制度の中に持ちこまない」と言い、語り手は「家族制度の改革をいつまでも社會評論家の手頃なお題目として任せておいてはいけないのだ」と述べる。親孝行の思想は「教育勅語」の「父母ニ孝ニ」に示され、「戦中・戦後の日本人の倫理観に対して、強い枠組みを与え」「親の意志に対して絶対の服従であり、生活上では、親の扶養を親の死ぬまで子供がなし遂げる[45]」内容だったとの指摘もある。この体制に美濃部夫妻は疑問を投じているのである。なお、作品発表の昭和二十二年十二月に改正民法が公布され、家制度が廃止された。

ストックホルムの「養老ホーム」を見た黒川武雄は「孫の世話をいやがる老人もあるが、又一方では老人と一緒に生活をいとなむことをきらう若い夫婦も少くない現在の日本で、ニコ〳〵顔で孫と歩く老婦人と、生活の不安はないが、何となく淋しそうな老人と、どちらの道をえらぶべきか。家族制度を維持し、尊ぶべきか、いなか。お互日本人が考えねばならぬことだろう[46]」と提案する。

近代文学と「家」の問題は一朝一夕には語れない。ただ、ここでは身内の介護という問題を媒介に、家族制度のありかたを問うている。昭和二十四年、本作が舞台化された際の劇評に「『厭が

らせの年齢』は民主主義で洗っても当分取れそうにもない日本の家族制度のしみを主題としているが、演劇として立体化されることは非常な喜劇」とある[47]。また昭和三十四年にラジオドラマとして放送された際には、「古い家族制度と新しい夫婦本位の制度との間にあって落着く場所がなく、息子たちの間をたらい回しにされるおばあちゃん（北林谷栄）のいやらしさと、それをたまらぬ思いで見守る息子たちの態度は、私たちに老後の生き方を十分考えさせるものがあった」と評されている[48]。設定が「息子たち」に変えられたものと想像される。

高橋氏は「介護は妻＝女性の役割という固定観念がある」「高齢男性はいわばエイジング・エリートといったイメージで彩られる一方で、うめ女のような高齢女性は過去の貢献が無化され、老醜として揶揄的に表象されている[49]」と指摘する。「恍惚の人」が発表された際、「特に高齢の女親の悲惨さは、男親より長生きすることからくる」「女親のひどく老いぼけた者は、鬼になって子を食おうとすることがある――と、今昔物語は注釈を加えている。これは中世の話だけれど、これと同じいやーな話が丹羽文雄の『厭がらせの年齢』だ」と「よみうり寸評」で記されている。昭和六年の『浴風園調査研究紀要』における「性能検査成績」報告[50]では「作業速度」で「男子は八一～八五歳に於て極僅少の程度に女子に劣れる外は遥かに優れてゐる」、「反応時間の測定」で「男子の方が女子に比して少し優つてゐる」、「一般智能」は入園者の男性が九歳児辺、女性は八歳辺とされている。また別の「高齢者に関する統計的観察」の「記憶力、精神活動状況」でも「男子優れ女子劣れるを知る」との分析が見られる。当時の教育状況や被験者の来歴を考えれば、そこに男女差が生じるのも当然であろう。しかし、このようなイメージが、高橋氏の指摘する男性の「エイジング・エリート」、女性の「揶揄的」な「表象」を生んだと考えられるのである。

七　本作以降

以上のような、敬老思想への疑問、老人ホームの必要性、家族制度改革の提示以外の主張を三点挙げる。

①道徳のへの危惧（社會道徳なんて、全く無力なものだね。（略）不愉快な奴は誰かれの容赦なくはふり出して、自分の思つたとほりをずばずばとやつてのける奴が、勝ちなのさ。（略）日本人の倫理・道徳といふものは、ほとんど書物の中に置き忘れになつてゐるやうだね）

②生命讃美への疑問（生命が大切だとか、永生きは立派なことだとか、生命讃美といふことを、あたしは疑ふわ。九十まで生きたから立派だといふことは、無責任な、好奇心以外の何物でもないわ。（略）自分でもこれ以上生きたくないのに生きてゐるやうな、何のために生きてゐるのやら、あたしたちを厭がらせるだけの生命なんて、ちつとも尊重出來ないわ。（略）人間は、自分の生命で虐待されたり、呪はれたりもしてゐるものだと思ふわ）

③宗教による救済の限界（宗教の觀念が人間を捉へるには、或る程度の年齢の限度があるらしい。人間は、遺憾なことに、この限度を越えても、なほ生きる力を持つてゐる。（略）精神は、かつてそこにあつたといふ痕跡があるにすぎない。これでは、宗教もとりつく拠りどころがない。魂の發展など、それはまだ精神が若々しく、伸びる可能性のある場合に限られてゐるやうである）

これらの主張が盛り込まれた本作以降、高齢者や老人ホームはどのように描かれたのか。

昭和二十五年、石黒直男は「石笛を吹く男」「養老院実記」を発表した。「石笛を吹く男」は実在の人物がモデルとなっており、「波瀾万丈紆余曲折の閲歴を骨骼として、それに肉を与え皮膚を被せ血を通わしめてここに一篇の小説を創作」した作品である。「和楽園」に収容された老人たちは「ひがみ心が強く、些細なことにでも不平を云い、事毎に他と反撥して、喧嘩口論も絶え」ない。そこへ特殊な経歴を持つ法眞が教化主任になり、老人たちに変化が生じるという内容である。「養老院実記」はその「和楽園」のモデルとなった養老院を実際に見学した折のことが記されている。養老院は「未だに全国でも数が少」なく、「養老院に入り度くても入れない人が、全国にまだ多数居る」現状が語られる。この施設は東京の浴風園の次に大きく、診療所・病室・静養室・客間を備え、嘱託医が定期的に来て、薬剤師と看護師は常住している。さらにマッサージ師が毎週、奉仕に来るという。「これによって、読者諸兄が、いくらかでも養老院に対する認識を高め、且つ、此の事業に対する理解を深めらるるならば、私の望外の喜びとする所である」と結ぶ。

同年に発表された林房雄「厭がられの年齢（「厭がらせの年齢」の作者丹羽文雄君に）」は、七十九歳の老婆を抱える越智家の物語である。作中で、「厭がらせの年齢」について、

老醜の恐ろしさといふものを、身にしみて感じさせられた。それは全く悽惨な小説であつた。一人の老婆の姿を描いてゐるのであるが、（略）作者の筆力の冴えによつて、残酷なほど明確明瞭に、人間の老醜一般が浮彫りにされてゐた。精神は全然退化して、ただ我慾と我執と猜疑のみが残り、若い者達に對する厭がらせのみによつて自己の存在を主張する醜怪な怪物――それが老人といふものであるとすれば、老人になるのが厭になり、長生きすることが恐ろしくなる。それほどの強烈な感銘を與へる「脅迫的」とさへ形容したい小説であつた。

と記す。越智家の老婆は「老ひよりも耄けの方が昂じて、一家中に『物笑ひの種』、嘲笑と哄笑の種をまくことの方が多」い人物で、家族と衝突したり、女中が出て行ったりするが、本家「厭がらせの年齢」ほどの陰惨さはない。孫が祖母の良い点を思い出したり、越智さんが自分の老いた時のことを想定して話をしたりして、危機を乗り越える。

昭和三十年に発表された広津和郎の「老人ホーム」は、身よりを亡くした新保シモが甥の元に身を寄せるものの、甥の結婚を機

にパチンコ屋に住み込みで働くことになる物語である。老人ホームの悪評を聞いていたお霜は、甥に嫁を世話して、老後を託す算段であった。しかし、甥は社長の娘と婚約し、岳父の支援でお霜を老人ホームに入れる約束をする。増築中の老人ホームは火災に遭い、入所が延びているうちに甥は結婚、悪条件でパチンコ屋の住み込みで働き入所を待つが、老人ホームとの契約は勝手に解消されており、ホームに入る夢すらも消える。

その翌年に発表された源氏鶏太の「老人ホーム」は、「東京都伊豆山老人ホーム」と、その近所にある有料の老人ホームの見学記である。どちらも「予想していたような、老人の天国ではありませんでした」「日本の老人たちの立場が、今後、ますます、不幸になつて行くような気がしました」と述べる。

八　社会情勢

「厭がらせの年齢」が発表された頃、日本は社会福祉制度確立の過渡期にあった。昭和二十年には生活困窮者緊急生活援護要綱が作成され、翌年、生活保護法が成立、さらに翌年、児童福祉法が制定され、二十六年の社会福祉事業法と合わせ「福祉三法体制」が整う。先に述べたように、兵庫県で「としよりの日」が制定されたのと同じ年、大阪では日本初の老人クラブ「老友クラブ」と「常磐老人クラブ」が誕生する。

高齢者のみならず、社会的弱者救済のための福祉制度確立の根底には、ＧＨＱの強制や、戦時下に老人を「余計者」扱いした反省があったかもしれない。ところが、尊敬し丁重に扱うべき高齢者の一部には、うめ女のような人間もいるというのが現実である。「厭がらせの年齢」の語が流行語になったとすれば、それだけ介護に苦しむ人々が多く、共感を得たことの証左といえる。高齢者の様相を冷徹に描くのは、法整備が進む時代の流れに逆行する行為であったかもしれない。モデルとなった事件から二年経過しているというのは、単なる熟成期間とは思われない。このタイミングで発表することに意味があったと推察される。「厭がらせの年齢」は、人間の老化を直視し、形式上の福祉だけではなく、精神面の問題や、介護負担に踏み込んだ、画期的な作品であるといえるのである。

おわりに

本作は『文藝増刊號[51]』の「戦後十年傑作小説全集」に再録され、『日本小説代表作全集　第十六巻　昭和二十二年前半期[52]』にも収録された。そこでは田村泰次郎「肉體の門」等と共に「作者自身にとつて劃期的な進展を見せてゐる作品である。同時に文壇の収穫として記録すべき仕事である」と評価されている。臼井吉見も「戦後の収穫と見られるもの[53]」のうちの一作品に挙げている。「腕だけでかいた無意味な作品だ[54]」（荒正人）との批判も見られるが、「創作合評会[55]」では「丹羽君の正確な仕事・骨組はしつ

かりしている」（伊藤整）、「『厭がらせの年齢』の方が（引用者注：『理想の良人』よりも）面白かつた・丹羽君の丹羽君らしいもの」（青野季吉）と一定の評価を示し、「僕は丹羽君は好きな作家じゃない」と言う中野好夫も「丹羽君の力倆というものには敬服」している。中野は「昭和二十二年文學の問題[56]」の中でも「『厭がらせの年齢』あたりで一飛躍した作家丹羽文雄を承認しないわけにはゆかない。（略）逞ましいまでの人間群像の創造を企圖しているかに見える」と述べている。

長薗安浩氏は本作を取り上げ、「まるで現在の高齢者問題を題材にしているような錯覚すら覚える[57]」と述べ「『厭がらせの年齢』と彼自身が送った晩年の光景（引用者注：丹羽は約二十年間認知症を患い百歳で死去）は深く絡みあい、これからも難解な宿題として、私に人間の生命の意味を問いかけてくる」と括る。作品発表当初に比すれば、認知症への理解は広がり、対応策も講じられ、医学的にも研究が進んでいる。社会保障制度は整備され、まだ不足しているとはいえ介護施設も拡充しつつある。しかし「難解な宿題」は容易に解ける問題ではない。その点において、本作は少しも古びず、「文壇の収穫」「戦後の収穫」だけではない、もっと大きなものを孕んでいるといえよう。

※本文引用は初出誌に拠る

① 二〇一七年五月一七日公開の世界保健統計（WHO）による。

② いわゆる「団塊の世代」が全員七十五歳以上になり、国民の五人に一人に達することにより、特に都市部で医療・介護の提供体制が追いつかなくなる問題をいう。

③ 厚生労働省・みんなのメンタルヘルス（https://www.mhlw.go.jp/kokoro/speciality/detail_recog.html 二〇一八・一一・二二閲覧）

④ 内閣府・認知症高齢者数の推計（https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2017/html/zenbun/s1_2_3.html 二〇一八・一二・七閲覧）

⑤ 藤寿々夢「赤羽尭『砂漠の薔薇』論（下）」（『郷土作家研究』二六号 二〇〇一・三 七三頁）「黄昏文学」の定義が曖昧であり、「黄昏文学は死をもって終わるのが常である」（七九頁）と指摘されるが、「厭がらせの年齢」はこれに該当しない。

⑥ 「丹羽文雄・人と作品」（『昭和文学全集 第十一巻』小学館 一九八八・二・九 一〇六二頁）

⑦ 「表題は流行語にもなる」中島国彦「年譜」（『鮎・母の日・妻』講談社文芸文庫 二〇〇〇・一・一〇 二八九頁）、「その表題は流行語ともなりました」四日市市立博物館・プラネタリウム 丹羽文雄記念室（http://www.city.yokkaichi.mie.jp/museum/miru/niwafumio.html 二〇一八・一一・一八閲覧）、「『厭がらせの年齢』は、流行語となる」「季刊むさしの」一〇三（二〇一三年夏号・一二頁）、「この小説の題名が一時流行語になったのをみると、かなりの共感をよんだことがわかる」（『日本大百科全書2』小学館 一九八五・二・二〇

六一六頁）など。

⑧「『厭がらせの年齢』にみる高齢者ケア―痴呆文学としての側面―」（『保健の科学』二〇〇五・三　二〇二頁）

⑨塩田勝編『現代の流行語』（三一書房　一九六三・一二・七）／中江克己『新雑学入門　明治大正昭和の流行語』（日本ライフブックス　一九七二・五・二〇）／奥山増郎『現代流行語辞典』（東京堂出版　一九七四・九・一〇）／『読める世相・風俗・流行語年表』現代用語の基礎知識一九八三年別冊／廣橋信夫『昭和世相流行語辞典』（旺文社　一九八六・一一・一〇）／山田俊幸他『流行語カタログ』（泰流社　一九八七・七・一〇）／グループ昭和史探検著『昭和流行語辞典』（三一書房　一九八七・一〇・一五）／米川明彦『新語と流行語』（南雲堂　一九八九・一二・五）／米川明彦編『明治・大正・昭和の新語・流行語辞典』（三省堂　二〇〇二・一〇・一〇）／大迫秀樹編著『消えゆく日本の俗語・流行語辞典』（東邦出版　二〇〇四・八・一五）／木村傳兵衛他『新語・流行語大全』（自由国民社　二〇〇六・一二・二四）／講談社編『暮らしの年表／流行語１００年』（講談社　二〇一一・五・一九）

⑩暉峻康隆『西鶴　評論と研究　下』（中央公論社　一九五三・二・一五　一五四～五頁）

⑪東洋経済新報社　一九五三・五・二〇

⑫医歯薬出版　一九五八・五・一七

⑬古谷綱武「丹羽文雄おぼえ書（二）『いやがらせの年令』をめぐつて」（『風雪』一九四七・一二　二八～九頁）

⑭亀井勝一郎「丹羽文雄論―作家論ノートⅢ―」（『文学界』一九四八・一　六七頁）

⑮⑥に同じ

⑯佐々木亜紀子「『厭がらせの年齢』論―〈老い〉をめぐるジェンダーの偏差―」（『社会文学』三五号　二〇一二　一一七～八頁）

⑰『尾崎一雄全集』第十五巻（筑摩書房　一九八六・一・三〇　二六二～三頁）

⑱『理想の良人』（風雪社　一九四七・五・一五　一五六頁）

⑲永井博「排除の論理とその批判的契機―丹羽文雄「厭がらせの年齢」論―（『金沢大学国語国文』三四号　二〇〇九・三　八七頁）

⑳「小説に描かれた婦人像　生を完了した肉体　丹羽文雄作「厭がらせの年齢」のうめ女」（「朝日新聞夕刊」一九五三・一一・二二　二頁）

㉑⑪に同じ　三三頁

㉒鹽尻公明「老年に就いて」（『新潮』一九四七・六　四一頁）

㉓介護福祉士養成講座編集委員会編『新・介護福祉士養成講座一二　認知症の理解』（中央法規出版　二〇〇九・一・二〇　二〇頁）

㉔井原康夫「アルツハイマー病研究の歴史とこれからの展望

（『スプリングマインド』No.1　小野薬品工業　二〇一一　四頁）

㉕ 第三七回日本認知症学会学術集会　市民公開講座より（「朝日新聞夕刊」二〇一八・一一・一九　六頁）

㉖ ㉔に同じ。二一頁

㉗ 日本聖書協会　一九八九　以下同じ。

㉘ 「老いた者、必ずしも知恵があるのではなく、年とった者、必ずしも道理をわきまえるのではない」（ヨブ記三二-九）

㉙ 井筒俊彦訳『コーラン（中）』（岩波文庫　一九六四・一一・一六　九六頁）

㉚ 宇野哲人『論語新釈』（講談社学術文庫　一九八〇・一・一〇　二九〇頁）

㉛ パット・セイン編著　木下康仁訳『老人の歴史』（東洋書林　二〇〇九・一二・八　五八頁）

㉜ 「姥捨山伝説」（『日本大百科全書3』一九八五・四・二〇　二〇二頁）

㉝ 仏教説話文学全集刊行会『仏教説話文学全集2』（隆文館　一九八〇・六・二　一七一～六頁）

㉞ ⑫に同じ。一八三頁

㉟ 河畠修他『増補高齢者生活年表　一九二五～二〇〇〇年』（日本エディタースクール出版部　二〇〇一・一一・三〇　六頁）

㊱ 「ますます勝手に関西遺産　『敬老の日』発祥地」（朝日新聞夕刊　二〇一一・八・三一　三頁）加藤友康他編『年中行事大辞典』（吉川弘文館　二〇〇九・三・二〇）神戸新聞出版センター編『兵庫県大百科事典　上巻』一九八三・一〇・一）より

㊲ 中山保「老人ホームの夢」（『保険時報』九-三　東京保険時報社　一九五二・八・一　九頁）

㊳ 社会福祉辞典編集委員会編『社会福祉辞典』（大月書店　二〇〇二・一〇・一五　四四三頁）

㊴ 全国老人福祉施設協議会編『全国老人福祉施設協議会六十年史』（全国社会福祉協議会　一九九三・九・二一　三頁）

㊵ 間宮茂輔「老人ホーム」（『無花果の家』所収　改造社　一九三九・九・二二）

㊶ 小笠原祐次監修『老人問題研究基本文献集　第十八巻』（大空社　一九九一・四・二三）

㊷ 池川清『老人福祉』（関書院　一九六〇・五・一　引用は小笠原祐次監修『戦後高齢者基本文献集第三巻　老人福祉』日本図書センター　二〇〇六・五・二五　に拠る）

㊸ エディス・セルラース著　井口丑二訳『欧州救貧事業の大勢』（警醒社　一九一一・三・二〇　二五頁）

㊹ 「朝日新聞朝刊」一九五二・八・二　三頁

㊺ ㉟に同じ。二頁。

㊻ 黒川武雄『空の旅』（東光社　一九五一・一二・二〇　一三〇頁）

㊼ 新作座による公演で阿木翁助脚本。一、丹羽文雄「厭がらせの年齢」二、水木洋子「風光る」。劇評は「読売新聞朝刊」一九四九・一・一四　四頁に掲載。

㊽ 一九五九・六・二三、「現代日本文学特集」としてＮＨＫラジオ第二で放送。山下与志一脚色。「ラジオ週評」は「読売新聞」一九五九・七・三　五頁に掲載。

㊾ ⑯に同じ。一二二～三頁

㊿ 『浴風園調査研究紀要第三輯』一九三一・八（引用は㊳の第十四巻、第二十九巻に拠る）

(51) 一九五六・八増刊

(52) 編輯代表川端康成　小山書店　一九四八・八・一〇

(53) 臼井吉見「戦後十年文學の歩み」（(52)に同じ。四二六頁）

(54) 「読売新聞朝刊」一九四七・三・二　二頁

(55) 「創作合評会（2）」（『群像』一九四七・五　五二～三頁）

(56) 中野好夫「昭和二十二年文學の問題―主として傾向と意義について―」（『人間』一九四七・一二　二九頁）

(57) 長薗安浩「遺書、拝読　第一九回」（『中央公論』二〇〇五・七　二九四～五頁）

附記　本稿は「INTERNATIONAL SEMINAR ON JAPANESE LITERATURE」（主　催：INDO-JAPAN ASSOCIATION FOR LITERATURE & CULTURE　於：デリー大学　二〇一七・九・一六）にて発表したものを基にしている。ウニタ・サッチダナンド博士をはじめ、貴重な意見を賜った先生方に深謝する。